



Data

監督・脚本：テレンス・マリック
 出演：アウグスト・ディール/ヴァレリー・パフナー/マリア・シモン/トビアス・モレット
 イ/ブルーノ・ガンツ/マテイアス・スーナールツ/カリン・ノイハウザー/ウルリッヒ・マテス

👁️👁️ みどころ

超寡作で有名だった映像作家テレンス・マリック監督は2015年以降製作ペースを早めているが、それはなぜ？また、はじめて実在の人物を主人公とし、175分の長尺で掘り下げたのは、一人の農夫フランツの「A HIDDEN LIFE」だが、それは一体なぜ？

悪しきリーダーの悪しき戦争でも、国民は徴兵義務を免れない。それを拒否すれば、即逮捕、即銃殺？教会でさえ従順になった時代だが、信仰を貫けば徴兵拒否は当然では？しかし、それを貫けるのはごく一部の英雄だけ？

民主主義の機能不全が目立ち始め、世界全体がキナ臭くなっている昨今、改めてこんな男に陽の目を当ててみる意義は大。しかし、その悲しい結末をどう考えれば？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■まずテレンス・マリック監督論から！彼はなぜ本作を？■□■

私が映画界の“生ける伝説”と称えられている、1943年生まれのアメリカ人監督テレンス・マリックの映画をはじめて観たのは、彼の第3作目たる『シン・レッド・ライン』(98年)。そして、評論を書いたのは、第4作目の『ニュー・ワールド』(05年)だ。同作で同監督のことを詳しく勉強した私は、そこでは「ちょっと鼻につくナレーションの多用ぶり・・・」と書いた(『シネマ10』331頁)。

しかし、彼の第5作目たる『ツリー・オブ・ライフ』(11年)は、父と息子の確執をテーマにしたすばらしい映画で、第64回カンヌ国際映画祭パルムドール賞を受賞した。その評論で、私は「ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した『シン・レッド・ライン』をそ

れほど素晴らしい映画とは思えず、むしろ『プライベート・ライアン』（98年）の方に感銘を受けた。また、『ニュー・ワールド』の斬新な映像美にはびっくりしたが、ナレーションの多様ぶりは少し鼻についた。」と書いたが、その評論のラストでは、「あなたの神は？ テレンス・マリック監督の神は？」という見出しで「欧米の文化とそこにおける父 VS 息子の確執を理解するためには、神＝キリスト教の理解が不可欠だと実感！」と書き、非常に大切な彼特有の論点に迫った（『シネマ 27』14頁）。しかし、彼の第7作目たる『聖杯たちの騎士』（15年）はクリスチャン・ベール、ケイト・ブランシェット、ナタリー・ポートマンらビッグネームの起用にもかかわらず、私にはイマイチだった（『シネマ 39』未掲載）。

寡作家で有名だったテレンス・マリック監督はその後、立て続けに『ボヤージュ・オブ・タイム』（16年）、『ソング・トゥ・ソング』（17年）を発表し、さらに本作に至ったわけだが、突然これだけハイペースな映像作家に転じたのは一体なぜ？ また本作で、彼の映画史上はじめて実在の人物を登場させて、「Based on True Events」を発表したのはなぜ？ 本作を鑑賞するについては、まずそんな「テレンス・マリック監督論」が不可欠だ。ちなみに、本作のパンフレットには、テレンス・マリック監督作品全解説の他、①宇野維正氏（映画・音楽ジャーナリスト）の COLUMN 「『名もなき生涯』へと到った手がかりをテレンス・マリックの過去作と人生から探る」、②久保田和馬氏（映画ライター）の COLUMN 「映画によってあらゆるものを分断する境界線を越えるための希望の光」、③町山智浩氏（映画評論家）の COMMENTARY 「叛逆児としてのフランツ、キリストとの相似『A Hidden Life』に隠されたもの」があるので、それらの勉強をしっかりと。

■□■フランツって一体誰？なぜ無名の農夫を主人公に？■□■

本作の原題は『A HIDDEN LIFE』。つまり、本作の主人公フランツ・イエーガーシュテッター（アウグスト・ディール）の「隠された人生」という意味だから、いくら本作が「Based on True Events」であっても、フランツのことを知っている日本人は誰一人いないはず。本作の「PRODUCTION NOTES」によれば、「フランツの逸話は、ザンクト・ラーデグント以外ではほとんど知られていなかった。1970年代に当地を訪れたアメリカ人ゴードン・ザーンによる研究が無ければ、埋もれたままだったかもしれない。」と書かれているから、アメリカ人のテレンス・マリック監督も本作に着手するまで、きっとフランツのことは知らなかっただろう。

他方、本作は第2次世界大戦時にヒトラーへの忠誠宣誓を拒否し、ナチスへの加担より死を選んだオーストリアの片田舎に住んでいた無名の農夫フランツ・イエーガーシュテッターの真実の物語だ。しかして、テレンス・マリック監督は、なぜそんな男を本作の主人公に？

■●■ フランツは英雄？梶上等兵も英雄？ ■●■

私は大学1年生の時に、下宿で数名の仲間とよく文学論(?)を闘わせていたが、ある時議論のテーマになったのは、『人間の条件』の主人公・梶上等兵は英雄？それとも、一途なだけの平凡な男？ということ。日本全体が邪悪な戦争にひた進んでいく状況下、中国人の捕虜を働かせている自分の仕事が次第に非人道的なものとなり、挙げ句の果ては理不尽な命令によって理由なき死刑の執行をしなければならぬ立場に置かれたとき、彼はどうしたの？その結果訪れた懲罰徴兵に、彼はどう対応したの？そして、戦地でどう暮らし、日本陸軍が敗退した後、愛妻・美千子を求めて彼は荒野をどうさまよったの？

そんな梶の生き方に宗教が絡むことは一切なかったが、邪悪なナチスドイツへの協力を拒否(具体的には徴兵拒否)したフランツの根源に強いキリスト教信仰があったことが明らかだ。ちなみに、テレンス・マリック監督が心から尊敬しているマーティン・スコセッシ監督は、遠藤周作の原作を元に『沈黙—サイレンス—』(16年)を監督し、世間をあつと言わせた(『シネマ 39』163頁)が、同作でも信仰を巡るギリギリの人間性が描かれていた。テレンス・マリック監督は、第5作目の『ツリー・オブ・ライフ』で彼特有のキリスト教的思索を見せたが、主人公フランツを真正面から主人公に据えた本作では、きっと『沈黙—サイレンス—』が見せたキリスト教信者と同じ、いやそれ以上の試練に直面したフランツが、それにどう苦悩しかつ対処したのかを描きたかったのだろう。しかして、フランツ・イェーガーシュテッターという農夫は一体どんな男？

ちなみに、ベートーヴェンは交響曲第3番を『英雄』と名付けてナポレオンに捧げたが、ナポレオンが皇帝に就任すると、彼は「奴も俗物に過ぎなかったか」と激怒し、ナポレオンへの献辞の書かれた表紙を破り捨てたそう。それは、自分の曲に『英雄』というタイトルを付けたことを恥じ入ったためだ。しかして、ナポレオンは英雄なの？それとも？すると、梶上等兵は？そして、オーストリアの片田舎で生きる平凡な農夫フランツは？

■●■ 舞台はオーストリア。トラップ大佐は亡命したが彼は？ ■●■

私の邦画のベスト1は『砂の器』(74年)だが、生涯のベスト1に挙げるのは、高校3年生の時に7回も観た『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)。同作は、オーストリアの豊かな自然をたたえた山と谷の中で、ジュリー・アンドリュース扮する修道女マリアが歌う『SOUND OF MUSIC』の歌から始まり、ナチスドイツの迫害から逃れるため、アルプスの山を越えてアメリカへ亡命するトラップ大佐一家が歌う『Climb every mountain』の歌で終わる名作中の名作だった。

私は同作を観たことによって、オーストリアが如何なる事情でナチスドイツに併合されたのか、そして、ナチスドイツへの協力を要求されたトラップ大佐が、いかなる苦悩を経てアメリカへの亡命を決心したのかを勉強することができた。『サウンド・オブ・ミュージック』

ック』と同じように、本作冒頭では、オーストリアの美しい自然の中で山と谷に囲まれた畑を耕しているフランツと、その妻ファニ（ヴァレリー・パフナー）の姿が登場する。その前提として、テレンス・マリック監督は、恋人同士だった2人がじゃれ回る情景もサービスしてくれるから、子供に恵まれた後も含めて、この幸せがいつまでも続くと思っている2人の姿をしばらく温かく見守ってやりたい。もっとも、スクリーン上のその描き方、つまりカメラの向け方や照明のあて方などの撮影方法はテレンス・マリック監督特有のものだし、セリフをほとんど入れず、ファニのナレーションを中心にストーリーを見せていく手法もテレンス・マリック監督特有のものだから、それもじっくり楽しみたい。

『サウンド・オブ・ミュージック』のトラップ大佐は、予備役だったものが現役復帰させられようとした。それに対して、ナチスドイツに併合されたオーストリアの片田舎ザンクト・ラーデグントでは、農業用に男手が必要だったから、そこではまだ正式な徴兵命令は出されておらず、フランツたちはエンス基地での軍事訓練に招集されただけだ。訓練の中でもフランツとファニは往復書簡を絶やさなかったが、早々とフランスが降伏してしまったから、これにて戦争は早期に終結。フランツがそんな予測で我が家に戻ると、そこには生まれたばかりの3人目の娘も待っていたからフランツは大喜び。なぜかまだ独り身のファニの姉レジー（マリア・シモン）と共に平穏な農民としての生活が始まった。ところが、チャーチル率いるイギリスの頑強な抵抗のため、戦火は収まるところかますます激しくなってきたから、ザンクト・ラーデグントの村からも1人また2人と兵隊に召集されることに。

■□■召集令状がきたらどうする？拒否したら即逮捕？銃殺？■□■

そんな導入部で、まずテレンス・マリック監督が問題提起するのは、悪しき者（ヒトラー）から召集令状が届いた場合、自分が信仰するキリスト教の教えにかけて「兵役は断ります。罪なき人は殺せない」と言えるかどうかということだ。フランツは村の司教代理のフェルディナンド・フェルトハウアー神父（トビアス・モレッティ）にハッキリそう告げたが、フランツがそんなことを村人の前で堂々と述べればえらいこと。そこで、神父はヨーゼフ・フリーサー司教の下にフランツを連れて行って相談したところ、司教はフランツに対して「祖国への義務がある」と論じたから、アレレ。軍国主義化が急速に進む中で、日中戦争から太平洋戦争へと突き進んでいった日本では、宗教界や言論界、そしてマスコミ界では「侵略戦争反対」の声もあったが次第にそれが弾圧され、最期まで「天皇制反対、侵略戦争反対」を唱えたのは日本共産党だけになってしまったが、急速にナチスドイツの力が強まり、侵略戦争が始まる中、ドイツやオーストリアのキリスト教教会でさえそれに抵抗できず、ナチスドイツへの協力を余儀なくされたわけだ。

フランツと司教の議論(?)を聞き比べていると、フランツの方に理があることは明らかだし、司教の方はわかったようなわからないような理屈で説得しようとしていることも

明白。その結果、『サウンド・オブ・ミュージック』のトラップ大佐はアメリカへの亡命の道を選んだが、フランツは司教の説得にもかかわらず、あくまで徴兵拒否の道を選ぶことに。もちろん、早期に戦争が終わってくればラッキーだが、現実はそのもいかず、遂にフランツに対して召集令状が届くことに・・・。

■□■往復書簡もいいが、忠誠宣誓拒否と徴兵拒否の罪は？■□■

テレンス・マリック監督はナレーションを多用するのが大好きだから、「往復書簡」という力強い武器があれば、鬼に金棒。本作のパンフレットにも、「フランツとファニの往復書簡」が2頁に渡って掲載されており、劇中ではこれがフランツとファニ双方のナレーションで語られる。「往復書簡」といえば、私たち団塊世代では、ミコ（大島みち子）とマコ（河野實）の文通をネタとして映画化した『愛と死をみつめて』（64年）が超有名。また、レアなどころでは、学生運動していたころの必読文献の1つとされていた、宮本顕治と宮本百合子の『十二年の手紙』があった。

これらの手紙はそれぞれフランツとファニが真心込めて書いたものだから、それを聞いていると心に響くのは当然。しかし、弁護士の私としては、それはそれとし、他方で召集令状が届いたフランツがヒトラーと第三帝国への忠誠宣誓を拒否し、さらに兵役招集を拒否することがいかなる罪になるのか。そしてまた、それはどんな手続で裁かれるのかについて、もう少しわかりやすい説明がほしかった。

ちなみに、五味川純平の原作を映画化した山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70～73年）では、五代財閥の令嬢である吉永小百合扮する順子の恋人になった標耕平が「アカ」だったため、治安維持法違反で逮捕された後、「懲罰徴兵」で満州の戦地に送られていたが、徴兵を拒否したフランツにはどんな罪が待っているの？去る2月23日に観た『226』（89年）では、「昭和維新」を叫んで決起した青年将校たちは4日後には一転して「国賊」とされ、上告なし、弁護人なしの裁判で死刑判決を受けた後、即日銃殺刑に処せられていた。すると、忠誠宣誓を拒否し、徴兵を拒否したフランツも逮捕後、それと同じように・・・？いやいや、フランスほどの人権国家ではないとしても、ヨーロッパ的な人権思想と裁判制度が定着しているドイツではそんなことはないはずだ。しかして、フランツはいかに？

■□■拘留所は？法廷は？弁護人は？死刑の方法は？■□■

私の実務修習地は大阪だったから、大阪市都島区にある大阪拘留所の見学をさせてもらった。しかして、1943年3月2日にエンスに出頭したフランツはヒトラーと第三帝国への忠誠宣誓を拒否したため直ちに逮捕されたが、彼が入れられた独房は狭いながらも窓があるうえ、テーブルまであるからかなり立派だ。そして、同年5月4日、フランツは他の数名の囚人と共にベルリンの刑務所に移送されたが、その独房もそれなりに立派なものだ。スクリーン上では看守からいわれのない暴行を受けるシーンも見られるが、前述した

『戦争と人間』、さらには今井正監督の『小林多喜二』(74年)で見たような拷問風景は見られず、適当な間隔で庭での散歩や庭での食事等も確保されているから、いくらナチスドイツとはいえさすがにヨーロッパの人権意識は高い。そして、同年7月に帝国軍事法廷で開廷された裁判が、本作ではじめての法廷シーンになるので、それに注目！

本作のパンフレットには、「フランツ・イエーガーシュテッター略歴」があり、ここでは、逮捕から死刑執行に到るまでのフランツの裁判の経過が映画より正確に(?)かつ詳しく紹介されているので、これは必読！それによれば、フランツがリンツ近くの軍事拘留刑務所からベルリン郊外のテーゲルの刑務所に送致されたのは、フランツの事案は重大とされ、首都における帝国軍法会議での審議が必要と決定されたため、らしい。なるほど、なるほど。しかし、それならそれで、テレンス・マリック監督、なぜ映画の中でそれを解説してくれないの？それはともかく、この法廷で裁判長役で登場するのが、ドイツを代表する名優ブルーノ・ガンツだが、この裁判長による審議は如何に？また、フランツの国選弁護人フリードリッヒ・レオ・フェルドマンの弁護活動は如何に？

■■■本作には2つの不満が！■■■

本作全編を通じて私が納得できないのは、ドイツ語のセリフが全然字幕表示されないこと。本作はフランツとファニのセリフを中心として99%英語のセリフで構成されているが、拘置所のシーン等の一部ではドイツ語のセリフが混在している。ところが、そのドイツ語のセリフは全く字幕表示されないから、それが一瞬ならともかく、ドイツ語が長く続くと大きな違和感が出てくる。帝国軍法会議のシーンでも、軍人がドイツ語でわめいているシーンが登場するが、それが全く何を言っているかサッパリわからない。まさか、ドイツ語を日本語字幕にするスタッフを雇うのをケチったわけではないだろうから、これは一体なぜ？

さらに、『私は貝になりたい』(59年)でも、『226』(89年)でも、死刑執行のシーンが1つのハイライトになるのは当然。本作でも私はフランツにはどんな風に死刑執行がなされるのだろうと、興味を持って見守っていたが、正直それがよくわからなかった。前述の「フランツ・イエーガーシュテッター略歴」はそれがギロチンによるものだったことを含めて、詳しく解説してくれているが、なぜテレンス・マリック監督はこの死刑執行のシーンをもう少し丁寧に描いてくれなかったの？

■■■フランツの「A HIDDEN LIFE」をどう考える？■■■

フランツが「ドイツ軍における兵役義務の拒絶を申し立てた」ことにより、「軍事倫理に悪影響を与えた」として有罪となり、死刑判決が下されたのは1943年7月6日。他方、ヒトラーの自殺は1945年4月30日だから、1943年7月の時点ではナチスドイツの力はかなり弱まり、ひょっとしてこの戦争はナチスドイツの敗北で終わるかも？そんな

予測も一部にはあったはずだ。

しかして、国選弁護人のフリードリッヒ・レオ・フェルドマン弁護士が「弁護士の地位にも危険が迫っている」と言いながら、フランツに対して「もしフランツが考えを変えれば、裁判所は判決を取り下げるだろう」と話し、机の上の書類に署名すれば軍隊で生きながらえることができる、と翻意を勧めたのは当然。また、そんな書類があることを知ったアルベルト・ヨッホマン神父も、この戦争は長く続かないと考えていたから、フランツにサインを勧めたのも当然だ。ところが、そこでフランツは「不当な戦争をしている政府のために誓いを立てることはできないし、してはいけないと思う」と述べたから、この男はかなり頑固！その結果、8月9日の死刑執行に至ったわけだ。

ちなみに、死刑執行に立ち会ったヨッホマン神父は、後にオーストリア修道女団体で、「この同郷の一介の農夫が、教えを守り通し立派に帰天したことを誇りに思います。この純朴な男性こそ、私が生涯で会ったただ一人の本当の聖人です」と語ったそうだが、それって一体何の意味があるの？『沈黙—サイレンス—』でも同じだが、テレンス・マリック監督が175分の長尺で本作に描き出したオーストリアの農夫フランツの「A HIDDEN LIFE」を一体どう考えればいいのかのだろうか？

2020（令和2）年3月4日記